

□ 次の文章をよく読んで、後の問いに答えなさい。

われわれがよく言う「国際化」という言葉はどう訳すかというところ、辞書を見るとおわかりのように、グローバリゼーションあるいはグローバルイゼーションと訳しています。

われわれ日本人が「国際化」と言うときに、それはどういう意味で使っていますか？ どうも日本の商習慣や、行政のあり方など、①なにもかも非常に特殊な国である日本は、国際社会とはちよつと違う。だから、われわれの習慣を国際社会の習慣に合わせなくてはいけない。国際化と言うときには、国際習慣に合わせる——グローバルスタンダードとよく言われる世界標準に合わせることに国際化だと、そういう意味で、われわれ日本人は国際化という言葉を使っているわけです。

では、その訳語であるグローバリゼーション、これはどういう意味でしょうか。グローバリゼーションは「グローバル」という言葉が基になっています。グローバルというのは、地球の球、地球儀のことです。英語で地球はアースでしょ？ と思われるかもしれませんが、グローバルは地球の球形、つまり丸いことを強調するときに使います。グローバリゼーションというのは、英語ですから、イギリスやアメリカが、自分たちの基準で、自分たちの標準で世界を覆いつくそうというのがグローバリゼーションです。

ですから、私は<sup>\*1</sup>同時通訳のときに、日本人が国際化と言うと、すぐ自動的にグローバリゼーション——ロシア語ですから、グローバルイゼーションという言葉ですが——と、ほとんど同じ言葉に訳してきましたが、今話したように、ほんとうは逆の意味なのです。「国際化」と言うとき、日本人が言っている国際化は、国際的な基準に自分たちが合わせていくという意味です。国際村に、国際社会に合わせていく。

アメリカ人が言うグローバリゼーションは、自分たちの基準を世界に<sup>\*2</sup>普遍させるということです。自分たちは変わらないということ。自分たちは正当であり、正義であり、自分たちが憲法である。これを世界各国に強要していくことがグローバリゼーションなのです。

つまり、同じ国際化と言っても、自分を世界の基準にしようとする「グローバリゼーション」と、世界の基準に自分を合わせようとする「国際化」とのあいだには、ものすごく大きな溝があるわけです。正反対の意味ですよ。②これを私たちはちゃんと自覚するべきだと思います。これが第一の問題点です。

第二の問題点は何か？ 世界に自分たちを合わせなくてはいけない、と日本人が考えるときの世界あるいは国際社会とは何かです。これは日本人の伝統的な習性で、その時々の世界の最強の国が、イコール世界になってし

まう傾向があります。しかも、世界最強の国というときに、何を基準に世界最強と判断するか。基本的には軍事力と経済力、これだけを見て、文化を見ません。文化を見ないにもかかわらず、なぜか世界最強の軍事力と経済力を持つ国は文化も最高だと錯覚してしまう傾向があります。

この習慣はずっと昔から続いています。実に長いあいだ、日本人のお手本は中国でした。現在、日本語にカタカナ語が氾濫しているということが問題になっていますが、日本語に漢語が入り込んだ当時、その割合は、今のカタカナ語の比ではありませんでした。今日のわれわれの日本語は、かつて中国から入ってきた概念や言葉なしには成立しません。私が今、皆さんに話している言葉にも、いっぱい漢語が入っています。日本語そのものがあの時期に変質したぐらい、大量に漢語が日本に入り込んできました。

(中略)

では、日本語はそのままずっと中国語を入れつづけていたのかというと、そうではないのです。これはほんとうに世界でも珍しくて、おもしろいんですけれども、日本という国、あるいは日本という国の文化の発展の仕方を見てみると、無節操に無批判に全部開いて、外から文化、文字、法律、なにかからなまでにまで取り入れる時期と、貝のように閉じてしまつて、外からなるべく入れないようにしようとする時期——例えば、江戸時代の鎖国していた時期があります。日本の歴史を見ると、日本の文化は貝みたいに関閉する時期と、全開してなんでも取り入れる時期とが、交互に来るのです。

大陸にある国というのは、鎖国したり、開国したりすることができません。大きい国なら少しはできるかもしれませんが。それでも、地続きですから、鎖国すると決めても、ほかの国が強い軍隊でもって蹴散らしたら、その国は蹂躪じゆうりんされて、侵略されてしまったら、もう閉じてはいられません。ですから、開国したり鎖国したりすることができるのは、日本が海に囲まれているからで、要衝となる港のようなところを押さえてしまうと、鎖国が成立するわけです。

鎖国と言うと、私たちはなんとなくマイナスの概念でとらえがちです。開国と言うと、オープンでどこかプラスのイメージがあります。明るいイメージがあります。鎖国と言うと暗いイメージがありますが、日本は、開国の時期に無節操に大量に外から取り入れたものを一生懸命、鎖国の時期に消化するのです。消化して不要なものは排泄はいせつして、日本に向けたものをどんどん日本化していく、自分のものにしていくわけです。

(中略)

先ほどの話に戻りますと、もともと日本と日本文化には、③その時々世界最強と思える国、イコール世界最

高の文化を持つていると思ひ込んで、その国の文化を熱烈に、ある意味では無批判に無節操に取り入れる癖があるんですけども、それは、最初は中国でした。おそらく中国に出会ったことで、あまりにもすごい文明だったので、この日本文化の特徴が生まれたのかもしれない。エジプト、メソポタミアを一つとして、インド、中国は世界の三大文明で、そのうちの一つといきなり出会ったわけです。この時代が非常に長かった。

江戸末期になると、まだ鎖国時代ですけども、今度は日本の知識人たちにとって、最高の文化はオランダとオランダ語になっていきます。命がけでオランダ語を勉強します。蘭学らんがくという学問分野まで出てくる。

(中略)

これを見ていくと、日本は世界というものをとらえるときに、ほんとうの世界ではなくて、日本にとって身近な世界、最強の国を一つ定めて、その文化を④一心不乱に取り入れようとする傾向があることがはっきりしています。この日本の文化の、あるいは日本人の行動様式というか、習慣はかなり根強く、日本が外国と接するときにこの特徴がよく表れてきます。

(中略)

それからもう一つ、世界中の国々の言語で蓄えられた文化は、英語にはそのうちの微々たるものしか翻訳されていません。だから、英語を知ったからといって、それぞれの文化にアクセスできるわけではないのです。⑤英語を知ったからといって、世界を知ることができないはずがないんです。英語によつて知ることができるのは、英語にされているものだけです。

昔、オランダ語のみを通してでは世界を知ることができなかつたように、ほんとうは英語だけを通して世界を知ることなどできないし、ある意味で、こういう形で英語を絶対化することは英語に対して失礼です。というのは、日本人が英語一辺倒になって、英語を重要視する最大の理由は、別に英語で蓄えられた文化に対して惹かれられているというよりも、その経済力とか軍事力に頼って生きていこうとしているからであつて、ある意味では非常に打算的で下品なわけです。

ほんとうの国際化というのは、世界にあるさまざまな文化と、英語経由、オランダ語経由、中国語経由ではなくて、国と国同士が直接の関係を築くことなのです。国際というのは国と国とのあいだという意味ですから、これは言葉だけではなく、外交においても、文化交流においても、どこかの国、どこかの言葉を經由して——何か国語かを經由していくと、⑥の感があります。そうではなくて、直接の関係を築いていくことがほんとうの国際化になる、国際交流になるし、理解にもつながるわけです。

(中略)

先ほどからグローバリゼーションと国際化がどれだけ違うかというお話をしてきましたけれども、この二つはほんとうに違う、正反対の概念でありながら、実はセットになっています。世界最強の国の基準に世界中を合わせようとする「グローバリゼーション」と、世界最強の国に自分が合わせていくという「国際化」、これは正反対だけど、コインの裏表の関係になっているわけです。迎合するか、従属させるか、そのコインの裏表でぴったり合っているのです。

私はほんとうの国際化というのは、現実の国際化よりもはるかに困難だけれども、別なところにもっとおもしろい道があるというふうに考えています。一時的な経済力とか、軍事力などからはもっと離れた形で、世界のいろいろな国の（⑦）、言葉というものを見て、それと日本語との直接の関係を築いていくことだと思えます。それがほんとうの国際化であるし、そのことによって、世界も日本も豊かになるというふうに考えます。

(『米原万里の「愛の法則」』集英社新書)

## 《注》

\*1 私……筆者自身を指し、ロシア語の通訳をしていた時の体験を記している。

\*2 普遍……全体に広く行き渡ること。例外なくすべてのものにあてはまること。

問一 傍線部①「なにもかも非常に特殊な国」とありますが、日本が地理的に特殊であることを示す具体例を本文の二ページ目から探し、八字で抜き出さない。

問二 傍線部②「これ」の指す内容を八十字程度で説明しなさい。

問三 傍線部③「その時々」に世界最強と思える国」とありますが、具体的な国名を本文中から三つ探し、時代順に答えなさい。

問四 傍線部④「一心不乱」と同様の意味を持つ四字熟語を本文の二ページ目から探し、抜き出しなさい。

問五 傍線部⑤「英語を知ったからといって、世界を知ることができない」とありますが、それにも関わらず、日本人が英語を学ぶ理由は何か、筆者の考えとして適当なものを次の記号から一つ選んで答えなさい。

- ア 現在では、英語を公用語とする国が一番多く、より多くの人々と交流することができから。
- イ 他の言語に比べて、英語が一番身近で、学習環境も整っており、習得しやすい言語だから。
- ウ 英語で蓄積された文化を学ぶことで、グローバルな視点を養うことができるから。
- エ 英語が使われている大国の経済力や軍事力を当てにし、その恩恵を受けようとしているから。

問六 空欄⑥に当てはまる四字熟語を次の記号から一つ選んで答えなさい。

- ア 一石二鳥
- イ 一日千秋
- ウ 隔靴搔痒かつかさうよう
- エ 本末転倒

問七 空欄⑦に当てはまる語を本文中から探し、抜き出しなさい。

問八 本文に書かれている内容として適当なものを次の記号からすべて選んで答えなさい。

- ア 一つの言葉を学ぶだけでは、世界を知ることはできない。
- イ 特殊な事情をもつ日本が国際社会で活躍するのは難しい。
- ウ アメリカやイギリスなどの英語圏の国々が言う「国際化」に合わせる必要がある。
- エ 日本は鎖国をしたために、世界から孤立してしまうことになった。
- オ それぞれの文化や言葉を持っている国々と、直接関係を築いていくのが本当の「国際化」である。

□ 次の文章をよく読んで、後の問いに答えなさい。

「エンデュランス」という長距離耐久乗馬レースに挑戦する中学生の少女・まりも。サイファという名の白馬を相棒に、師匠の志渡やサイファのオーナーの娘・理沙に見守られながら、ひたすらゴールを目指す。しかし、ライバルの高岡の存在や様々なアクシデントが、まりもの行く手を阻む。

「どうする、まりも。お前は続けられそうか？ それともここでやめとくか？」  
まりもは、迷った。

理沙が心配そうに見ている。その目が、やめたっていいんだよ、と言いたがっているのがわかる。

「……大丈夫。行く」

「そうか。よし。行ってこい」

本来の順路だった林の中へと、まりもは再び一人で入っていった。

この期に及んで、三十分以上もロスしてしまった。後続の選手たちももうみんな先に行ってしまっただろう。制限タイムは午後三時二十分、あと二時間強。とにかく最後の一人になってもいいから時間内にたどりついて、それで獣医検査をパスできたら御の字だと思おうしかない。

サイファの速歩<sup>\*1</sup>は、もうほとんど歩きに近いくらいの重さだった。

目の端に、手綱を結んだ余りの革紐<sup>かわひも</sup>が映る。これを振り回して一発鞭<sup>むち</sup>をくれてやれば、サイファはびくつとなつて、いっぺんにきびきびと走りだすだろう。エンデュランスの競技ルールで鞭と拍車は使用を固く禁じられているけれど、今なら……この林の中でなら、誰も見てなんかない。一発や二発くらいなら痕<sup>あと</sup>も残らない。ほかの馬術競技だったら、あるいは調教中だって、ごく当たり前に行われていることだ。

（ A ）——と、まりもは唇を噛んだ。

なぜだろう、いやなのだ。何があるうとそれだけはしたくなかった。

偽善者ぶっているつもりはない。どんなに弱くていいかげんな人間かは、自分がいちばんよく知っている。

ただ、こういう瞬間にだけは、大事な何かをごまかしたくないのだった。どんなに馬が動かなくても、そのへの枝を折り取って尻をひっぱりたいはしたくない。人に対してより何より、馬に対してフェアであることを放棄してしまうくらいなら、最初からこんな競技に出なければいいのだ。長い、ながい距離を共に走りきった時、

①馬の目をまっすぐ覗きこめる自分でいられないのなら、今のこの苦しさにさえ何の意味もなくなってしまうんじゃないか。

ゆっくり、ゆっくり、まりもは速歩と常歩を交互に続けた。

②気持ちを立て直そうと、誰も聞いていないのをいいことに歌を歌い出すと、サイファの両耳がひよいと後ろへ動いて、また元に戻った。

てつきりビリだと思っていたのに、やがて後ろからドサンコのおじさんが追いついてきて、しばらく一緒に歩いた。彼によれば、後ろにもまだ何頭かいるとのことだった。

「一頭、第三レグ<sup>\*4</sup>に出る前の時点で棄権したのもいたよ」と彼は言った。「念のために点滴を打ってたようだけど」

レースの最中は、馬に對するいかなる医療行為も認められていない。治療したければ、その前に棄権する以外にない。弱っている馬をよく効く注射一本で無理やり走らせるなどということのないように、そういうルールが定められているのだ。

それにつけても、レースの序盤で暴走した馬たちが、今になって次々に潰れてしまっている。狙ってのではないにせよ、結果的にはまんまと高岡たちにしてやられたというわけだ。

まだまだだな、とまりもは思った。

この競技はほんとうに、いつ何が起こるかわからない。状況をきちんと把握して、それに正しく対処できる者だけがレースを制するのだ。

最後のクルー・ポイント<sup>\*5</sup>は、ゴールから十三キロ手前の、大きな川を渡った先にあつた。向こう岸には、志渡と理沙とがすでにスタンバイしていた。

急な土手の斜面を、一歩ずつ上手に下りたサイファは、けれど、川の真ん中で突っ立ったまま彫像のように動かなくなってしまった。

水を飲みたいのではない。冷たい水が肢に気持ちいいのだ。というよりも、もうこれ以上、一歩も動きたくないのだ。

まりもは、鞍の上から体を傾けてサイファの目を覗きこんだ。黒々とした瞳にきらきら光る川面が反射して、吹き渡る緑の風がその白いたてがみをそよがせている。

③唐突に、声をあげて泣きそうになつてしまった。

川底の小石を見おろしながら、自分自身の胸の底をまさぐる。

——さあ、どうする。

④ むずかる サイファをどうにか促し、志渡たちの待つほうへと斜面を上がった。  
「どうする？」

全部わかつているみたいに、志渡がまりもを見あげた。

「肩……やっぱりかばってるよね」

と、まりもは言った。

「うん。そうだな」

「でも、そんなにひどくはない？」

「うん。ひどくはない」

「ここから先、あたしが下りて、サイファを曳ひいて走ったら、このびびつこ治なるかな」

「無理だと思う。獣医検査はもしかすると誤魔化ごませるかもしれないけど、痛みはしばらく残るんじゃないか。たぶんね」

まりもは、激しく迷った。

もう一度、自分で自分を問いたです。

「わかった」まりもは言った。「ここでやめる」

「いいのか？ お前はそれで」

「いい。全然かまわない。サイファには、まだまだ先があるもの。優勝がかかっているわけでもないのに、今ここで無理させることに意味はないと思う」

「じゃあ、本部に電話して、馬運車うまうんしゃまわしてくれて連絡していいか？」

「はい。お願いします」

( B ) 志渡は、

「よし。オッケー」

明るく声を張って言った。むしろ志渡自身が、この瞬間に何かをふっきったようにも見えた。

下りようか、とまりもが訊きいても、志渡は、せめてそのまま馬運車が来るまで乗っててやれやれさ、と言いった。

理沙が黙ってにつこりしながら、サイダー味の飴あめと冷たい水のボトルを手渡してくれた。⑤ こんなにおいしい

水を飲んだのは初めてのよう気がした。

川べりで待つ間に、ずっと昔に追い越した覚えのある馬と乗り手が川を渡ってきた。そのままよろよろと油照<sup>\*</sup>りの道をゆく後ろ姿を見送りながら、まりもは言ってみた。

「あのね、志渡さん」

「うん？」

「これ、負け惜しみとかじゃなくてね。なんだかあたし、今、すっごい爽やかな気分なんだよね」

サイファの腹帯<sup>\*10</sup>をチェックしていた師匠が、ちらりと馬上を見あげて笑った。

「そっか。お前もか」

「え？」

「じつは、俺もなんだわ」

( C ) ゴトゴトとやってきた馬運車に、なかなか乗りたがらないサイファを道端に生えていたヨモギで釣ってまんまと乗せ、その後ろを車で走った。そうしてみると競技場まではまだずいぶんと距離があり、まりもはつくづくと、やっぱりあそこでやめてやってよかったと思った。痛む肩をかばったままこの距離を走らせるのは、いくらなんでも酷だ。

ゴールゲートをくぐることなく獣医検査場へ行き、最後のチェックをしてもらおう。なんと、心拍をふくめてサイファの検査結果はオールA、歩<sup>\*11</sup>様にも異状は認められず、志渡に曳<sup>ひ</sup>かれたサイファは軽快な速歩で獣医師たちの前に駆けてくると立ち止まり、ふう、と大きなため息をついた。

第三レグのスタートを見てくれた獣医師長の浅野が、慎重に肢を触り、まりもに向き直って言った。

「あの時点以上には、悪くなつてないよ。よっぽど上手に乗ってきたってことだね。したけど、ここで最後に無理をさせなかったことが、この馬のためには絶対によかった。棄権は勇氣ある決断でした。これこそがエンデュランスの精神というものです。お疲れさまでした」

口々にねぎらってくれる獣医師たちや大会スタッフに、ヘルメットを取って、ありがとうございました、と頭を下げながら、まりもは、また泣きそうになってしまった。

( ⑥ ) に、ではない。誇らしさに、だった。

後になってふり返れば、すべての敗因は、高岡たちに追いついたあのあたりにあったのかもしれない。二十分という時間差を、距離にしてほんの十五キロほどの峠道で一気に詰めた時点で、サイファの疲れは最高潮に達し

ていたはずだ。

追いつかれたことに気づいた高岡が、まりもを引き離そうと馬に蹴りをくれて駆けだしたあの時、まりもは本来ならばサイファを抑えてやらなくてはならなかった。なぜなら、サイファがそこまで懸命に走り続けてきた間じゆう、高岡たちの馬は、少なくともサイファよりはるかに遅いペースで体力を温存していたのだから。

レースの翌々日、志渡からその分析を伝えられた時、まりもはただただ納得する以外なかった。まさにそのとおりだと思った。

そうして、今になるとまりももまた思うのだった。

木々の陰に、前をゆく高岡の赤いシャツを見つけたあの時、あえてこっそりペースを落としていたらどうだっただろう。感情にまかせてぎりぎりまで追いつめたりせず、彼らが追いつかれていないことに気づかないくらいの距離をおいて、それこそ志渡の言っていたようにひたひたと後ろを付いていってれば……今ごろ、レースの結果はひっくり返っていたかもしれない。

「失敗すると、完走したときの百倍もものを考えるよな」と志渡は言った。「サイファの、現時点での弱点や限界も少し見えてきたしな」

もしも何ごともなく優勝なり完走なりしていたら、喜び以外に、今ほどの収穫はなかったかもしれない。馬に負担をかけずに上手に乗るための技術とはまた別に、エンデュランスには、かつて漆<sup>\*1,2</sup>原が言っていたとおり、この競技特有の「レースの組み立て方」というものがある。速さや持久力を競う中にも、コースに合わせた頭脳プレイの部分がたしかにあるらしいのだ。

「あたしも、あたし自身の悪いところがはっきり見えたよ」

「いいことだ。サイファと同じで、それだって『現時点での』ってことどもな」

今度こそ——と、まりもは思う。次に挑戦するレースこそは、誰にも文句を言わせないくらい見事に完走してみせたい。できるだけいいペースを保ちつつ、確実に八十キロの完走を狙っていききたい。

「そだな」

と、志渡は言った。

「（ D ）、あくまでも『いいペースを保ちつつ』だからな。完走狙いだからって、最初からビリッケツをのろのろ行くのって、俺あんまり好きじゃないから」

「志渡さん。あたしを誰だと思ってるの？」

「あ？」

きよとんとした志渡に向かって、まりもは言った。

「⑦志渡銀二郎が見込んだ、唯一の弟子だよ」

(村山由佳『天翔る』講談社文庫)

《注》

- \* 1 速歩……………馬の歩法の一つ。分速二二〇メートルほど。
- \* 2 常歩……………馬の歩法の一つ。分速一〇メートルほど。
- \* 3 ドサンコ……………北海道産の馬の品種。
- \* 4 レグ……………エンデュランスのコースはレグと呼ばれるいくつかの区間に分けられている。
- \* 5 クルー・ポイント……………クルーと呼ばれるサポータスタッフの待機場所。ここでは、志渡と理沙がクルーとして参加。
- \* 6 びっこ……………片足を引きずるような歩き方。現在は差別用語とされているが、作者の記述どおりとした。
- \* 7 馬運車……………馬を輸送する自動車。
- \* 8 さ……………北海道方言。語尾に付ける。
- \* 9 油照り……………風がなく、薄日がじりじりと照りつけて、じっとしていても汗のにじみ出るような天気。
- \* 10 腹帯……………馬具の一つで、鞍くらを馬の背に固定するための带状の道具。
- \* 11 歩様……………馬の歩き方のこと。どこかに故障や疾患を持つ馬は、歩様に乱れが出る。
- \* 12 漆原……………サイファのオーナー。理沙の父。

問一 空欄A～Dに当てはまる接続詞を次の記号からそれぞれ一つ選んで答えなさい。(選択肢は一度しか使えません。)

- ア やがて
- イ すると
- ウ ただし
- エ でも

問二 傍線部①「馬の目をまっすぐ覗きこめる」とありますが、これを言いかえた別の表現を本文中から探し、十一字で抜き出さない。

問三 傍線部②「気持ち」とありますが、このときの主人公の心情として不適当なものを、次の記号から一つ選んで答えなさい。

ア 一瞬でも馬に鞭を振るおうと考えた自分の弱さと未熟さを感じている。

イ 馬が思うように動かず、制限時間内にゴールに着けるかどうかと焦っている。

ウ 周りに他の選手の姿が見えず、自分だけが取り残されたと感じている。

エ 疲れがピークに達し、ルール違反をしても早くゴールにたどり着きたい。

問四 傍線部③「唐突に、声をあげて泣きそうになってしまった」とありますが、その理由を七十字程度で答えなさい。

問五 傍線部④「むずかる」とありますが、具体的な様子を表した一文を探し、最初の五字を抜き出しなさい。

問六 傍線部⑤「こんなにおいしい水を飲んだのは初めてのよな気がした」とありますが、その理由を五十字程度で答えなさい。

問七 空欄⑥に当てはまる語として適当なものを、次の記号から一つ選んで答えなさい。

ア うれしき      イ 悔しき      ウ 懐かしき      エ 寂しき

問八 傍線部⑦「志渡銀二郎が見込んだ、唯一の弟子だよ」とありますが、ここから読み取れる主人公の心情として適当なものを、次の記号から一つ選んで答えなさい。

ア 師匠が素晴らしいから、その唯一の弟子である自分は、努力しなくても結果を出せると自負している。

イ 現時点で修正しなければならぬ反省点もあるが、それさえ乗り越えれば問題ないと思っている。

ウ 次のレースでは、今回の反省を踏まえて、師匠の期待通りの結果を出そうと意気込んでいる。

エ わざと挑発してくる師匠に対し腹を立てており、今度こそ絶対に完走してやろうと思っている。

〔三〕 次の古文を読んで、後の問いに答えなさい。

あるじのいはく、これより出羽の国に大山を隔てて、道定かならざれば、道しるべの人を頼みて越ゆべきよしを申す。さらばと言ひて人を頼みはべれば、究竟の若者、反脇指を横たへ、櫛の杖を携へて、①われわれが先に立ちて行く。今日こそ必ず②危ふきめにもあふべき日なれと、辛き思ひをなして後に付いて行く。③あるじの言ふにたがはず、高山森々として一鳥声聞かず、木の下闇茂り合ひて④夜行くがごとし。雲端にちちふる心地して、篠の中踏み分け踏み分け、水を渡り、岩に蹶いて、肌に冷たき汗を流して、最上の庄に出づ。かの案内せし男のA言ふやう、「この道必ず不用のことあり。恙なう送りBまゐらせて、仕合はせしたり」と、⑤喜びて別れぬ。後に聞きてさへ、胸とどろくのみなり。

（『ビギナーズ・クラシックス おくのほそ道（全）』角川ソフィア文庫）

《注》

- \* 1 あるじ：……ここでは、宿の主人を指す。
- \* 2 出羽の国：……現在の秋田県・山形県にあたる。
- \* 3 究竟：……たくましい。
- \* 4 反脇指：……反りの強い脇指。護身用に腰に差した刀。
- \* 5 雲端にちちふる：雲の切れ端から、砂混じりの風が吹き下ろす。（杜甫の詩からの引用）
- \* 6 篠：……篠竹。細くて群がって生える。
- \* 7 最上の庄：……最上地方。現在の山形県尾花沢地方。
- \* 8 不用のこと：……めんどろな事。
- \* 9 恙なう：……無事に。

問一 傍線部 A 「言ふやう」・ B 「まゐらせて」を現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書きなさい。

問二 傍線部① 「われわれ」のうちの一人はこの作品の作者ですが、その姓名を漢字で答えなさい。

問三 傍線部② 「危ふきめ」に備えて持参したものを本文中から探し、すべて抜き出しなさい。

問四 傍線部③ 「あるじが言ふにたがはず」とありますが、「あるじ」が何と言っていたかがわかる部分を探し、最初と最後の四字をそれぞれ抜き出しなさい。(句読点は含みません。)

問五 傍線部④ 「夜行くがごとし」と感じているのはなぜか、その理由を簡潔に説明しなさい。

問六 傍線部⑤ 「喜びて」とありますが、その理由として適当なものを次の記号から一つ選んで答えなさい。

ア 案内をした報酬をたくさんもらえたから。

イ 不案内な道を間違えることなくたどり着けたから。

ウ 何事もなく、送り届けることができたから。

エ 「あるじ」に恩を売ることができたから。

四 次の——線部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

- ① 模型飛行機の尾翼が壊れた。
- ② 干潟で千鳥が鳴く。
- ③ 葉で痛みが緩和された。
- ④ 資料を携えて会議に出席する。
- ⑤ 図書館で雑誌を閲覧する。

五 次の——線部のカタカナの言葉を漢字に直しなさい。

- ① 彼は無名なシセイの学者だ。
- ② 卒業証書をジユヨする。
- ③ 職場のドウリヨウとはよく気が合う。
- ④ お年寄りに席をユズる。
- ⑤ ボウセキ工場を見学する。

【問題は以上です。】

